



双極性障害の診かたと治しかた
—科学的根拠に基づく入門書—

寺尾 岳 著
星和書店
2019年11月 104頁
本体価格 1,800円+税

本誌の読者であれば周知のことであり、わざわざ紹介するまでもないかもしれないが、本書の著者である寺尾岳先生は、大分大学医学部精神神経医学講座の教授であり、日本うつ病学会の理事を長く務めておられるとともに、『双極性障害の治療ガイドライン』のメイン執筆者でもある。また、日本臨床精神神経薬理学会の英文誌である Clinical Neuropsychopharmacology and Therapeutics (CNPT) の Editor-in-Chief も長きにわたって務められていた。すなわち、わが国における双極性障害の薬物療法（臨床精神神経薬理学）に関する第一人者である。本書は、双極性障害と薬物療法の専門家である寺尾先生が書かれた、双極性障害の診断と治療に関する「科学的根拠に基づく入門書」（本書の副題）である。

本書はおそらくは、一般向けに書かれたものと推測されるが、なかなか高いレベルの内容であり、精神科専門医であっても読むに値すると思われる。第1章は、双極性障害の疫学的データに始まり、旧約聖書のサウル王の物語から現代のアキスカルに至るまでの双極性障害（躁うつ病）の歴史が約4ページの分量でコンパクトにまとめられている。以下、双極性障害の診断（第2章）、「双極スペクトラム」という概念（第3章）、双極性障害の特徴（第4章）と続くが、寺尾先生の本領発揮は何と言っても第5章の治療編であろう。少し前までの寺尾先生といえば、リチウム研究者という印象を持っている読者も多いと思われるが、本書に書かれているリチウムに関する知識は、誰も真似ができないレベルであろう。ちなみに、リチウムに関する記載は、本書の1割あまりという分量であることから、寺尾先生のリチウムに対する思いの強さが伺い知れる。むろ

ん、他の薬剤についても蔑ろにしているわけではない。ラモトリギンの有効血中濃度の話と、血漿ラモトリギン濃度の予測式は、精神科専門医であっても一読の価値があると思われる。

次の第6章は、日本うつ病学会の治療ガイドラインの話題である。さすがはメイン執筆者の一人であるだけのこととはあり、治療ガイドラインの記載内容の根拠などについての説明は説得力がある。第7章の妊娠に関する記載とともに、ためになる内容であると思う。

第8章は「光調整療法」の話である。最近の寺尾先生と言えば、（寺尾先生ファンしか知らないネタかもしれないが）「オレンジのサングラス」である。詳細は本書をお読みいただきたいが、光調整療法は、安価で副作用もない、期待の非薬物療法であると思う。

第9章は「実存的アプローチ」について書かれている。寺尾先生と言えば薬物療法と思っている向きには、ちょっと意外な内容と思われるかもしれないが、双極性障害治療に対する寺尾先生の情熱を知っている読者であれば、当然の到着点と思うであろう。

冒頭で書き忘れていたが、寺尾先生は油彩画（油絵）を描かれる。その作品のいくつかは著名な賞を受賞しており、ご趣味というよりはプロ級の腕前である（以前、何枚かスライドショーで見せていただいたことがある。それ以来、書評子は密かに「寺尾画伯」とお呼びしている）。それゆえ書評子は、本書を手にとったときに、寺尾画伯の油彩画が各章ごとに挿入されていることを期待していたのであるが、予算の関係か、残念ながら画伯の油絵を鑑賞することはできなかった。代わりにというわけではないのだけれど、本書のイラストは、画伯が原図を描いて、教授秘書さんが整えたものとのことである。これはこれで味があってよいと思う。

最後に、本書の書評とはまったく関係がないのだが、以前に書評子が大分を訪問したさい、寺尾先生から、大分駅に隣接した、屋上に露天風呂のあるホテルに宿泊することを強く勧められた。露天風呂から観る大分市街はなかなかの絶景で、後に旅行会社のパンフレットの表紙にもなっていた。本書を読みながら、なぜか不意にそのことを思い出した。コロナ禍が終息したら、また訪ねてみたい。

（山田和男）